

TOPICS

当院は、三学会構成心臓血管外科専門医認定機構心臓血管外科専門医認定修練施設に認定されました。



第14回 知って得するよもやま塾

去る2011年5月28日に当院の6F講堂にて恒例の”知って得するよもやま塾”を開催いたしました。今回は、当院心臓血管外科 南村部長による「下肢の血管閉塞とバイパス手術」、看護部ヘルスケアチーム西口淑子看護師による「動脈硬化の予防について」、有富時也理学療法士による「気軽なウォーキング」という演題で講義が行われ多数の地域の皆さんに情報提供をさせていただきました。



職員・家族 日帰りバス旅行

去る2011年7月10日 職員・家族を対象に日帰りバス旅行を実施いたしました。前回の金剛山企画に続き、第2弾！舞鶴方面は浜坂へ行き、但馬海岸の遊覧船クルーズや海鮮料理を堪能いたしました。総勢50名以上の多くの参加者がありまして、にぎやかなイベントとなりました。クルージングでの海のきれいは半端でないです。小さなお子さんにとっては、夏の楽しい思い出となったことでしょう！！



編集後記 広報室 M

先日、こっそりと奈良県は天川村へ行って来たのです。ここには芸能の神様・弁財天さんが祭られていたり、温泉があったり、有名なパワースポットでもあります！



天王寺は阿倍野から下市口まで近鉄電車で約1時間、そこからバスで約1時間と2時間コースの距離なのですが、逆にたった2時間でこの美しい大自然が満喫できるのです。

今のところ、私には、まだ新しい能力の兆候が見られませんが、パワースポット訪問のご利益は、きっとこの机上の仕事が全て勝手に終わっているという現象を引き起こすでしょう・・・っと毎日、根気強く机上を観察しております(笑)

*東住吉森本病院のホームページでも情報が日々更新されております。 <http://www.tachibana-med.or.jp>

morimoto report

Vol.4 2011・Aug

http://www.tachibana-med.or.jp/ 〒546-0014 大阪市東住吉区鷹合3丁目2番66号 TEL:06-6606-0010 (代表) Fax:06-6606-0055 創刊者: 志村博康/編集長: 山崎伸

施設基準 一般病棟入院基本料 7:1 を取得いたしました。

去る2011年6月1日に、当院は、施設基準である一般病棟入院基本料 7:1 を取得いたしました。これは、急性期医療に対応した病院で平均して入院患者7人に対し看護職員1人が実際に勤務していることを意味します。当院では時間ごとと病棟ごとで下記のような配置になっています。

3階から5階までの病棟

日勤 8:30~17:00	看護要員1人について患者様 3名以内を担当
	看護補助者1人について患者様 14名以内を担当
夜勤 16:30~9:00	看護要員1人について患者様 13名以内を担当
	看護補助者1人について患者様 40名以内を担当

2階の病棟 (ICU・救急病室)

日勤 8:30~17:00	看護要員1人について患者様 2名を担当
夜勤 16:30~9:00	看護要員1人について患者様 2名を担当

(*本コンテンツは、株式会社朝日新聞社に無断で転載することを禁止いたします。)

薬剤師の病棟における活動が朝日新聞に掲載されました。

朝日新聞は、「チーム医療は今」という特集で当院の病棟薬剤師の活躍を取材し、2011年6月29日夕刊に掲載されました。現在病棟では多くの患者さんが種類のお薬を服用されています。これらのお薬を適切に服用してもらうために薬剤師は医師・看護師と共にチーム医療を実践しています。

今回掲載された記事で病棟薬剤師の業務がご理解いただけると思います。これからも当院は、色々な視点から安心して患者様にご利用いただけるような活動を通じて日々努力を重ねてゆきたいと思っています。

事故防止薬剤師病棟へ

「チーム医療は今」

薬剤師が病棟で活躍する姿が朝日新聞に掲載された。記事によると、薬剤師は医師・看護師と共にチーム医療を実践し、患者の安全を確保している。また、薬剤師は患者の薬の服用状況を把握し、副作用の予防や薬の相互作用のチェックなどを行っている。記事は、薬剤師の業務の重要性を強調し、患者の安全を守るための取り組みを紹介している。

薬剤師が病棟で活躍する姿が朝日新聞に掲載された。記事によると、薬剤師は医師・看護師と共にチーム医療を実践し、患者の安全を確保している。また、薬剤師は患者の薬の服用状況を把握し、副作用の予防や薬の相互作用のチェックなどを行っている。記事は、薬剤師の業務の重要性を強調し、患者の安全を守るための取り組みを紹介している。

第4回 舞洲 Intervention Basic 講習会

去る2011年5月13日、舞洲ロッジにて「舞洲 Intervention Basic 講習会」を実施いたしました。これは、若手循環器医師の育成を目的とした講習会で、院内外から講師を募り研修医を対象にしています。当院からは、広瀬先生より「冠動脈造影とインターベンションの基礎」について講義があり、エコー、CTなどImaging modalityについての解説や、バルーン、ステント、ロータブレーターなどPCIデバイスの選択とリスクなどについて解説。瓦林院長より、人体血管模型シミュレーターを使ったPCI手技の実習が行われ、実際のBalloon、STENT、GuideCathを使用して解説。また 坂上祐司先生より「心臓以外のインターベンション」について 閉塞性動脈硬化症 (ASO) の基礎的な話から診断、治療について解説、早期発見・早期治療が重要であることを強調しました。また院外からは、ベルランド総合病院 片岡 亨先生が、血管内プラークの豊富な動画を提供され「冠動脈 imaging と physiology を冠動脈インターベンションに活かそう」を講義され、また 大阪市立大学医学部附属病院 島田健永先生より「循環器で世界に発信したデータ、これからするデータ」を講義され、自由な発想で、“安価でしかも自宅でも出来る”をコンセプトにユニークな研究発表事例を述べられました。そのユニークな発想は研修医のみならず、ベテランの医師にも非常に好評でありました。



南大阪循環器セミナー

去る2011年6月16日、南大阪循環器セミナーが実施されました。不整脈治療と脳卒中治療の話題で、循環器疾患を扱う上で要となる話を中心に講演会が開催されました。当院からは、金森森先生より「不整脈治療の考え方～Common Diseaseとしての心房細動治療を中心に～」というテーマで講義が行われ、不整脈を構成する除脈、期外性収縮、頻脈などについて各々薬物療法やカテーテルアブレーションによる治療をケースごとに解説しました。また、期外性収縮における心房細動については疫学的な視点からこれをCommon Diseaseとして位置づけ、その治療戦略を合併・併存症の話題も交えながら講義しました。続いて 国立循環器病研究センター 脳血管内科部長 豊田先生からは「脳卒中再発予防のための新しい抗凝固療法～血圧管理の重要性を含めて～」という話題で講義いただきました。脳卒中患者に対する抗凝固療法の話では、最近、最もホットな薬剤ダビガトランについて解説。同薬剤の構造を説明した上で、従来のワーファリンと比較しながら詳細にその導入方法について解説されました。



第3回 東住吉がん診療連携懇話会

2011年6月18日、当院6階講堂にて「がん診療連携懇話会」が行われました。本会は昨年2月に「第1回 東住吉消化器がん診療連携懇話会」として始まりましたが、本年4月に「大阪府がん診療拠点病院」に指定されたのを契機とし、広く「がん診療」全般にわたる地域連携を推進すべく、今回より「がん診療連携懇話会」と名称変更して開催されました。まず、一般演題①として、田中副院長より、「大阪府がん診療拠点病院としての当院の取り組み」というタイトルで、国や府は「拠点病院」という制度下になどのようにして「がん対策」を推進しようとしているのか、それに対して当院はどう取り組むのかという説明がありました。また、当院が得意とする腹腔鏡下大腸がん手術や頸椎十二指腸切除術なども紹介されました。続いて一般演題②として、当院緩和ケア認定看護師の江口さんより、「当院における緩和ケアチームの取り組み」というタイトルで、1年前からボランティアチームとして始動し本年4月に正式な院内チームとなった「緩和ケアチーム」について紹介され、チームとして関わった印象的な事例の紹介も行われました。後半の特別講演では、ベルランド総合病院外科・乳腺外科副部長の山崎圭一先生に、「がん診療拠点病院としてのベルランド総合病院緩和ケアチームの取り組み」と題して、がん診療における早い段階からの緩和ケア導入の必要性、自院におけるこれまでの積極的な取り組みについて、とても判りやすく講演いただきました。当日は、あいにくの雨天にもかかわらず、地域の先生方、訪問看護関係者、薬剤師など多くの皆様にご参加いただき、熱のこもった質疑応答やディスカッションが行われました。この分野における地域連携の必要性が強く認識される会となりました。



病診連携勉強会 ～脳卒中地域連携ネットワーク～

去る2011年6月18日、当院と地域の開業医さんとの脳卒中に関する医療連携を強化する目的で病診連携勉強会がスイスホテル南海大阪で開催されました。

当院からは脳神経外科医長 磯野先生より「脳卒中治療と高血圧～身近な大問題～」というテーマで講演が行われました。脳卒中治療における血圧管理のノウハウや、高血圧性脳症の診断、また脳卒中予防を“食生活”の視点から解説し、管理栄養士とのチーム医療的なアプローチにも触れました。各テーマについては、論文などのデータ解説もあり非常に密度の濃い勉強会でした。

